

# 保幼小の架け橋期における小学校教育の充実についての研究

－「10の姿」を踏まえた学校の教育目標を実現するための保幼小連携・接続の在り方－

香美市立山田小学校 教諭 長尾 花奈  
高知県教育センター 主任指導主事 河添 佐和  
チーフ 弘畑 吏浦

5歳児から小学校1年生の2年間である「架け橋期」は、幼保小が意識的に協働して子供の発達や学びをつなぐことが重要とされている。本研究は、学校の教育目標を実現するために保育者等と小学校教員が保幼小連携・接続の視点で見取った幼児期の経験や学びを共有し、それらを生かした小学校教育の充実を図ることを目的としている。そこで、保育職場体験では保育参観シートを活用した5歳児参観と協議の仕方を提案し実施した。交流活動では交流活動計画の様式を活用して、保育者等と小学校教員と一緒に交流活動の計画を立てることを提案し実施した。その結果、保育者等と小学校教員が「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりに子供の成長を中心に据えて幼児期に生まれた資質・能力を共有したことを踏まえて教育活動を実施するという保幼小の架け橋期における小学校教育の充実に近づくことができた。

## <キーワード>

幼児期の経験や学びの共有、保幼小連携・接続の視点、学校の教育目標の実現、小学校教育の充実

## 1 研究目的

本研究の目的は、保幼小の架け橋期において、園と小学校が「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」（以下、「10の姿」という。）を踏まえた視点で見取った幼児期の経験や学びを共有して、小学校での学習や生活に生かすことで、小学校教育のさらなる充実につながる保幼小連携・接続の在り方を提案するものである。

### (1) 国と高知県の現状と課題

「学びや生活の基盤をつくる幼児教育と小学校教育の接続について～幼保小の協働による架け橋期の教育の充実～」(中央教育審議会初等中等教育分科会幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会、2023)には、「教育基本法において『生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なもの』として規定される幼児期の教育と小学校以降の教育とを円滑につないでいくためには、子供の成長を中心に据え、関係者の立場を越えた連携により、発達の段階を踏まえた教育の連続性・一貫性を基に、接続期の教育の充実に取り組むことが必要である。」とある。さらに、「乳幼児期の子供それぞれの特性など発達の段階を踏まえ、一人一人の多様性や0歳から18歳の学びの連続性に配慮しつつ、教育内容や指導方法を工夫することが重要である。」とある。また、子供の資質・能力や学びの連続性を確保するために、『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』を手掛かりに、幼児教育施設は、小学校以降の教育を見通しながらその基盤となる資質・能力を育成していくことを、小学校は、幼児教育施設で生まれた資質・能力を踏まえて、教育活動を実施することを求めている。」とある。「幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き（初版）」(文部科学省、2022)によると、「小学校との連携の取組を行っている幼児教育施設は約9割に上るなど、取組が進展してきている。」と一定の成果がある一方、「幼稚園・保育所・認定こども園の7～9割が小学校との連携に課題意識があり、各園・小学校における連携の必要性に関する意識の差がある。」などといった課題が指摘されている。

高知県教育委員会事務局幼保支援課が実施した「令和4年度保幼小連携・接続の実施状況アンケート」によると、保育者と小学校教員が連絡会や交流会等を3回以上実施した割合は、保育所・幼稚園等が56.8%、小学校が58.2%だった。保育所・幼稚園等と小学校が5歳児の引継ぎで確認した

ことについては、保育所・幼稚園等と小学校ともに一番多かった回答が「一人一人の子どもの育ちや学びについて（要録の活用など）」で、保育所・幼稚園等が93.4%、小学校が94.6%、次に多かった回答が「特別な支援を必要とする幼児の育ちと支援の在り方について（就学児引継ぎシート等）」で、保育所・幼稚園等が72.1%、小学校が85.9%だった。一方、保育所・幼稚園等と小学校ともに一番少なかった回答は「幼児期の環境構成を生かした学習環境について」で、保育所・幼稚園等が25.7%、小学校が31.0%だった。また、「入学当初の課題や取組を進めるにあたって困ったことや、県に支援してほしいことについて」に対する記述から、連携・接続に対する課題は保育所・幼稚園等と小学校で異なることがうかがえる。小学校では「個別支援が必要な児童が年々増えているため、支援員等の配置の拡充などで、年間を通して支援体制の充実を図ってほしい。」など支援の必要な子供についての意見がある。一方、保育所・幼稚園等では、「引継ぎシートも重要だが、小学校の先生には直接子供達が遊ぶ姿や生活する姿を見てほしい。」など子供の育ちの共有を図りたいという意見がある。

## (2) A 小学校の現状と課題

高知県内A小学校区では保幼小連携・接続の視点を、A小学校の教育目標と研究主題に関連させて平成30年度から「10の姿」の「自立心」と「言葉による伝え合い」の二つに設定し、保幼小連携担当教員を置いて、園との連携・接続を行っている。また、5歳児の引継ぎの際に、連携・接続の視点に関する10の姿共有シート「②自立心」と「⑨言葉による伝え合い」（以下、「共有シート」という。）を園から受け取っている。そして5歳児担当保育者等と1年生担任を中心として、4月に保幼小連絡会、11月に5歳児と1年生の交流活動、2月に5歳児の一日入学、3月に5歳児の引継ぎを行っている。また、7月には連携先の園で保育職場体験を行っており、低学年担任を中心に希望者が参加している。

今回、保幼小連携・接続についての研究の機会を得ることで、幼児期の教育と小学校の教育を円滑につないでいくためには、小学校教員が保育者等と幼児期の経験や学びを共有し、それらを小学校教育に生かすことで、1年生は園での経験を生かしながら小学校での学びや生活を発展させていくという今求められている架け橋期における小学校教育の充実の重要性に気付いた。その気付きのもと、研究者が保幼小連携担当だった際に実施した保幼小連携・接続に関する年間行事の内容を振り返ると、二つの課題が見えてきた。

一つ目は、保幼小連携・接続が低学年中心の取組に留まっていたのではないかとということである。昨年度、研究者が保幼小連携担当だった際、A小学校が学校教育目標に関連させて保幼小連携・接続を二つの視点で行っていることや、年間行事を行う中で見られた5歳児や1年生の様子を校内研修などでA小学校全体に伝えていなかった。そのため、A小学校教員は学校教育目標の実現を目指すために幼児期から育みたい力を伸ばしていくこと、そのために保育者等と小学校教員が保幼小連携・接続の二つの視点で幼児期の経験や学びを共有することが必要であるという意識をもちにくいのが現状である。

二つ目は、保幼小連携・接続の際に、「自立心」と「言葉による伝え合い」の二つの視点による5歳児や1年生の幼児期の経験や学びを保育者等と共有できただろうかということである。昨年度は、引継ぎで「共有シート」は保育者等から受け取るものの、支援が必要な5歳児の情報交換が話題の中心になっていた。保幼小連絡会では、協議の中心に保幼小連携・接続の二つの視点が提示されているが、1年生担任は参観授業を振り返り、授業改善について話していた。保育職場体験では、5歳児同士の関わり方や支援が必要と思われる5歳児を中心に参観するなど、人によって5歳児を参観する際に着目する点が異なっていた。交流活動と一日入学は、「共有シート」に記入されている幼児期の経験や学びを十分活用できずに、1年生担任だけで活動を計画していた。

このような現状の中、保幼小連携・接続の視点として設定した二つの視点が、A小学校区の幼児と児童の実態に即しているかどうかについて疑問を感じた。

そこで、まず保幼小連携・接続の二つの視点がA小学校区の幼児・児童の実態に即しているかどうかを確認するために、A小学校教員35名とA小学校区2園の5歳児担当保育者等10名に、5歳児と児童の「10の姿」について「現状（良いところや課題）」と「卒園時または学年末に現れてほしい5歳児または児童の具体的な姿」についての意識調査を実施した。小学校には令和5年6月に、2園には同年7月に実施し、A小学校教員26名、2園の5歳児担当保育者等10名から回答を得た。「現状（課題）」について、A小学校と2園が共に回答した中で、A小学校の三つの学年以上の教員が回答した項目の記述に注目し、教員と5歳児担当保育者等の記述を整理した（表1）。5歳児と三学年にわたって課題として上がった項目は、「協同性」である。5歳児と四学年にわたって課題として上がった項目は、「健康な心と体」、「自立心」、「道徳性・規範意識の芽生え」である。5歳児と五学年にわたって課題として上がった項目は、「言葉による伝え合い」である。以上のことから、意識調査をすることで教員と5歳児担当保育者等の考えを把握することができ、A小学校区が保幼小連携・接続の手掛かりとしてきた「自立心」と「言葉による伝え合い」の二つの視点が、A小学校区の幼児・児童の実態に即していることを再確認できた。その二つの視点に加えてさらに、教員と5歳児担当保育者等が「健康な心と体」、「協同性」、「道徳性・規範意識の芽生え」についても課題と捉えていることが分かった。保育所保育指針解説（以下、「解説」という。）に、『『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』が到達すべき目標ではないことや、個別に取り出されて指導されるものではないことに十分留意する必要がある。』と示されている。この意識調査から、育みたい資質・能力が明確になったため、そこに保幼小連携・接続の視点を置き、保育者等と小学校教員がその資質・能力を共有して保幼小連携・接続を行うところだが、本研究に限り、A小学校区がこれまでの保幼小連携・接続で積み重ねてきた「自立心」と「言葉による伝え合い」の二つの視点を軸にして、保幼小連携・接続における幼児期の経験や学びを小学校教育に生かすこととする。「自立心」と「言葉による伝え合い」の二つの視点を保幼小連携・接続の軸に置くことで、A小学校の教育目標の実現につながり、またA小学校区の課題である「健康な心と体」、「協同性」、「道徳性・規範意識の芽生え」の姿も関連して育っていくと考える。

表1 意識調査「現状（課題）」

学年等	健康な心と体	自立心	協同性	道徳性・規範意識の芽生え	言葉による伝え合い
5歳	<ul style="list-style-type: none"> <li>動きがぎこちない子がいる</li> <li>すぐに疲れる子がいる</li> <li>偏食や少食、時間がかかりすぎる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>できないことにぶつかるとうすぐにあきらめてしまう</li> <li>しなければならないことがあっても自ら動くことができない</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分の思いを通そうとトラブルになる</li> <li>友だちからの誘いをすぐに断ってしまう姿が見られる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ルールが違うと言ってもめめる</li> <li>急に何も言わずに遊びから抜けてしまう</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>話を聞く場面で集中できない</li> </ul>
1年	<ul style="list-style-type: none"> <li>怪我が多い</li> <li>給食の好き嫌いが多い</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自ら決めて行動する児童が少ない</li> <li>自分の役割分担への意識が弱い</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>他人の考えを聞く力が弱い</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>善悪の判断が不十分</li> <li>ルールを守る意識が弱い</li> <li>思いのまま行動する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>適切な言葉が足らずに相手に十分伝えられない</li> <li>話を聞くことが課題</li> </ul>
2年	<ul style="list-style-type: none"> <li>しんどさを訴える</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>言われないとしない</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分の意見に必死</li> <li>友達の見解への関心が低い</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ルールを守れない</li> <li>友達に対してきつく注意する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>きつい言葉や手が出る</li> </ul>
3年	<ul style="list-style-type: none"> <li>給食の好き嫌いが多い</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>集団での学習が困難な児童がいる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>善悪の判断が不十分</li> <li>ルールを守れない</li> <li>好奇心だけで行動する</li> <li>友達の考えや意見を受け入れられない</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>言葉が足りずにトラブルになる</li> <li>人の話を最後まで聞くことが難しい</li> </ul>
4年					<ul style="list-style-type: none"> <li>自分の考えが分かるように伝えることが難しい</li> </ul>
5年	<ul style="list-style-type: none"> <li>友達の輪の中に自分から入れない</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>学習用具の点検を自分でできない</li> </ul>			<ul style="list-style-type: none"> <li>感情に左右され相手に十分に伝えられない</li> <li>根拠や理由を示しながら話したり書いたりすることが十分でない</li> </ul>
6年		<ul style="list-style-type: none"> <li>手立てがないと自分から動けない</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>ふざけの気持ちが行き過ぎる</li> </ul>	

## 2 研究仮説

保幼小連携・接続に関する年間行事を実践する際に「10の姿」の「自立心」と「言葉による伝え合い」の二つの視点で見取った幼児期の経験や学びを保育者等と小学校担当教員が共有し、それらを小学校全体で共有することで、幼児期の経験や学びを生かした小学校教育の充実につながるだろう。

## 3 研究方法

### (1) 「自立心」と「言葉による伝え合い」の視点を軸にした保幼小連携・接続に関する年間行事

#### ア A小学校校内研修

実施日：令和5年6月2日、7月26日

対象：A小学校教員35名

実施方法：A小学校校内研修として実施

A小学校教員に対して、意識調査（6月）を実施するに当たり、A小学校区が「10の姿」のうち二つの視点を手掛かりとして保幼小連携・接続をしていることを伝えるため、「10の姿」と保幼小連携・接続の二つの視点について説明する。また、小学校教員が保育職場体験（7月）に参加するに当たり、保幼小連携・接続の二つの視点で5歳児の様子を見取るために、保幼小連携・接続の二つの視点に関する5歳児の姿について保育参観シートを活用しながら参観し、参観後は小学校教員が見取った5歳児の姿につながった保育者等の環境構成の工夫やその意図、保育者等の5歳児への関わり方をもとに、小学校に生かしたいことについて保育者等と協議することを説明する。

#### イ A小学校区B保育園での保育職場体験

実施日：令和5年7月27日

参観者：A小学校教員7名

参観対象：5歳児2クラス48名

実施時間：参観2時間、協議40分

研究者が作成した保育参観シート（別紙1）を活用して小学校教員が5歳児を参観し、その後保育者等と小学校教員が協議する。保育参観シートの作成と協議の内容については、「指導計画・園内研修の手引き～つくろう 笑顔の輝く明日の保育～【改訂版】」（高知県教育委員会事務局幼保支援課、2020）の「公開保育協議（KJ法）」を参考にする。

保育参観シートには「年長児の具体的な姿」、「楽しんでいること」、「その姿につながった環境構成」の項目を設定し、5歳児の具体的な姿を参観できるようにする。小学校教員は、保幼小連携・接続の二つの視点で5歳児を参観しながら、「年長児の具体的な姿」、「楽しんでいること」、「その姿につながった環境構成」の項目の順に記入する。「年長児の具体的な姿」の項目には、小学校教員が5歳児の具体的な姿を見取ることができるように、「誰が・誰と・どこで・何をどのようにしているか（回数・時間・会話・表情・視線・力の入れ具合など）」という参観での着目点を書き加える。「楽しんでいること」の項目には、小学校教員が「年長児の具体的な姿」から5歳児の「楽しんでいること」を考えることができるように、「具体的な姿より、5歳児の楽しんでいたことや思いや気持ち、経験していること、育ちつつある力など内面を推し測ってみましょう」と、記述する際の説明を書き加える。「その姿につながった環境構成」の項目には、小学校教員が「年長児の具体的な姿」はどのような環境構成のもとに表れたのかを考えることができるように、「教材や保育室、園庭など場の設定と保育者の援助（言葉がけや関わりなどの支援）」という説明を書き加える。小学校教員が保幼小連携・接続の二つの視点を意識できるように、三つの項目を「自立心」と「言葉による伝え合い」に分ける。さらに、保育参観シートの上部には「解説」を参考に、「自立心」と「言葉による伝え合い」の5歳児に見られるであろう具体的な姿を書き加える。また、小学校教員が保育職場体験を踏まえて小学校で生かしたいことについてどのように考えた

かを知るために、小学校教員は保育職場体験後に「今後の生活指導や教科指導に生かしたいと思うこと」を振り返りシートに記入する。

協議では、まず小学校教員が保育参観シートの「年長児の具体的な姿」、「楽しんでいること」、「その姿につながった環境構成」について見取った内容をそれぞれ黄色、ピンク色、水色の付箋に記入し、一枚の模造紙に貼り、その内容について詳しく説明する。次に保育者等が環境構成の工夫とその意図や保育者等の5歳児への関わり方を説明する。最後に保育者等と小学校教員が小学校で生かしたいことを話し合う。

保幼小連携・接続に関わる機会が少ない中学年や高学年の担任が5歳児の経験や学びを知ることができるよう、各学年から一名以上の参加を募る。

#### ウ 5歳児と1年生の交流活動

実施日：交流活動計画作成 令和5年10月23日

交流活動 令和5年12月1日

実施者：交流活動計画作成 A小学校1年生担任3名、B保育園5歳児担当者2名

交流活動 A小学校1年生担任2名と支援員1名、B保育園5歳児担当者2名、園長、加配保育士2名と補助員2名

対象者：A小学校1年生2クラス52名とB保育園5歳児2クラス48名

交流活動計画の様式（以下、「交流活動様式」という。別紙2）を活用して、保育者等と1年生担任と一緒に交流活動の計画を立てる。「交流活動様式」の作成については、「保幼小連携・接続交流活動事例集 改良版交流活動計画 あきのおたのしみかい」（高知県教育委員会事務局幼保支援課、2023）を参考にする。

「交流活動様式」には、「事前の学び（遊び・学習）」、「幼児期の経験や学び」、「活動のねらい」、「活動の展開」等の項目があり、それぞれの項目を「5歳児」と「1年生」の欄に分ける。「事前の学び（遊び・学習）」の項目の「5歳児」の欄には、秋の自然に触れるための園外散歩から交流活動までのことを保育者等が記入し、「1年生」の欄には生活科単元「たのしいあきいっぱい」の導入から交流活動までのことを1年生担任が記入する。1年生担任は、5歳児の「事前の学び（遊び・学習）」の項目の記述から、1年生が5歳児の時に園で秋に関するものを使っておもちゃを作った活動やその際に道具を使った経験を推測することができる。それにより1年生担任は、生活科の授業が5歳児の時の経験と比べて発展的な学習になるように工夫したり、使用した経験がある道具の使い方を1年生から聞き出したりすることができる。保育者等は、1年生の「事前の学び（遊び・学習）」の項目の記述から、1年生が交流活動に向けて生活科の授業でどのような学習をしているのかを具体的に知ることができるとともに、5歳児から1年生への成長の見通しをもつことができる。「幼児期の経験や学び」の項目の「5歳児」の欄には、4月から9月までの内容を保育者等が記入し、「1年生」の欄には5歳児の時の4月から3月までの内容を1年生担任が「共有シート」の内容をもとに記入する。5歳児と1年生の「事前の学び」と「幼児期の経験や学び」を生かして、交流活動で5歳児と1年生にどのような力を付けたいのかを保育者等と1年生担任が考え、共通理解のもとで指導を行うために、「活動のねらい」の項目を設ける。幼児期に育まれた5歳児と1年生の力を発揮したり、さらに伸ばしたりすることができる支援を保育者等と1年生担任が考えるために、「活動の展開」では「5歳児・1年生の活動」の項目に沿って「支援」の項目に「5歳児」と「1年生」の欄を設ける。保育者等と1年生担任が「交流活動様式」の各項目について話し合う際に、保幼小連携・接続の二つの視点の育みたい子供の姿を参考にして具体的な活動や支援を考えることができるように、「交流活動様式」の上部には「解説」を参考に、「自立心」と「言葉による伝え合い」の5歳児に見られるであろう具体的な姿を書き加える。

## (2) 検証方法

- ア 保育職場体験の協議における保育者等と小学校教員の発話及び付箋と振り返りシートの記述  
小学校教員が見取った5歳児の様子について、保幼小連携・接続の二つの視点で遊びの中の経験や学びを見取ることができているか、付箋の記述と協議で説明した内容を分析する。また、小学校教員が「今後の生活指導や教科指導に生かしたいと思うこと」について、自身で考えた「その姿につながった環境構成」や保育者等の発言をもとにどのように考えているかを、振り返りシートの記述と協議で説明した内容をもとに分析する。
- イ 交流活動の計画を立てる際の保育者等と1年生担任の発話と「交流活動様式」の記述  
5歳児と1年生の「幼児期の経験や学び」を踏まえて交流活動の内容が考えられているかについて、保育者等と1年生担任の発話と「交流活動様式」の記述を分析する。
- ウ アンケート調査  
A小学校区の保幼小連携・接続で大切にしている二つの視点を軸に実施した保育職場体験における保育参観シートと、交流活動における「交流活動様式」の活用等についてアンケート調査を行う。調査対象は、A小学校教員7名、B保育園5歳児担当者2名と園長、C幼稚園5歳児担当者1名である。質問内容は、保育職場体験の参加者、交流活動の実施者及び調査対象者全員に対する三種類を用意する。  
<保育職場体験の参加者に対する質問項目>  
「良い・どちらでもない・良くない」の三件法で行い、その回答を選んだ理由を質問する。  
①5歳児を参観する際に、「自立心」と「言葉による伝え合い」の視点を入れた保育参観シートを使用したことについて  
②事後協議の際に、「自立心」と「言葉による伝え合い」の視点を入れた保育参観シートを使用したことについて  
<交流活動の実施者に対する質問項目>  
「良い・どちらでもない・良くない」の三件法で行い、その回答を選んだ理由を質問する。  
①交流活動を計画する際に、保育者等と小学校教員が一緒に作成したことについて  
②交流活動を計画する際に、「自立心」と「言葉による伝え合い」の視点を入れた交流活動計画の様式を使用したことについて  
<調査対象者全員に対する質問項目>  
「意識するようになった・以前から意識していた・あまり変わらず意識しなかった」の三件法で行い、その回答を選んだ理由を質問する。  
保育職場体験や交流活動をとおして、A小学校区の保幼小連携・接続で大切にしている「自立心」と「言葉による伝え合い」の視点を、以前と比べて意識するようになったか
- エ 保幼小連携担当教員への聞き取り調査  
保育参観シートと「交流活動様式」を活用して保育職場体験と交流活動を実施した成果や改善点を分析し、次年度以降に生かすために、保幼小連携担当教員Dにアンケート調査結果をもとに聞き取り調査を行う。

## 4 結果

### (1) A小学校区B保育園での保育職場体験

これまでの保育職場体験は、参加した小学校教員によって5歳児を参観する際に着目する点が異なっており、協議は小学校教員がそれぞれの視点で見取った5歳児の姿が中心となっていた。そこで今年度は目的を明確にして実施した。目的は、小学校教員が保幼小連携・接続の二つの視点で5歳児の姿について見取り、見取った5歳児の姿につながった保育者等の環境構成の工夫や意図、保育者等の5歳児への関わり方をもとに、小学校に生かしたいことについて保育者等と話し合うこと

である。

小学校教員は、参観において保育参観シートの「自立心」と「言葉による伝え合い」の欄に「年長児の具体的な姿」、「楽しんでいること」、「その姿につながった環境構成」の項目に沿って保育参観シートと付箋に記述した。また協議では、付箋を〈自立心〉、〈言葉による伝え合い〉、〈環境構成〉の項目に分けて一枚の模造紙に貼りながら、その内容について詳しく説明した（図1）。

小学校教員が付箋に記述した内容と協議で説明した内容を、「自立心」と「言葉による伝え合い」に分けて整理した（表2、表3）。「自立心」に関する「年長児の具体的な姿」では、自分で目標を決めて竹馬に挑戦している5歳児についての内容があり、その姿から「竹馬に乗れるのが楽しい。自分で目標を決めてチャレンジ」という5歳児の「楽しんでいること」についての記述があった。また、「言葉による伝え合い」に関する「年長児の具体的な姿」では、友達と関わりながら絵を描いている5歳児についての内容があり、その姿から「友達や先生とのやり取りの中で描きたいものを工夫しながら描く」という5歳児の「楽しんでいること」についての記述があった。

「自立心」に関する「その姿につながった環境構成」では、竹馬遊びの場の設定の仕方や保育者等の5歳児への声かけに関する内容があった。それを受けて、保育者等は「自立心」を育むために、5歳児が自分たちでいろいろなことを考えて自主的に行動できるように5歳児に問いかけていることや、友達の様子を見て活動が広がるように工夫していることを説明した。「言葉による伝え合い」に関する「その姿につながった環境構成」では、保育者等の5歳児の発言の受け止め方やグループ活動に関する内容があった。それを受けて、保育者等は「言葉による伝え合い」を育むために、グループで日々の活動に取り組み、グループのメンバー構成を変えることでいろいろな友達と関わり合うようにしていることを説明した。小学校教員からは「今後の生活指導や教科指導に生かしたいと思うこと」として、児童の目につくところに片付け方を示して今までよりさらに自分達で片付けることができるようにするや、図画工作科の授業で課題をイメージしにくい児童のためにグループ活動を取り入れて互いの作品を見て話しながら制作できるようにするなどの発言があった。

小学校教員が記入した振り返りシートの「今後の生活指導や教科指導に生かしたいと思うこと」では、保育室の環境を参考にして教室環境を整えること、図画工作科で作品を制作する時に他者の考えを参考にできるようにグループを作ること、保育者等の子供同士をつなぐ5歳児への言葉がけを参考にしたいという記述があった。

このように、保育職場体験では小学校教員が見取った5歳児の姿とその姿につながった環境構成をもとに、今後の生活指導や教科指導に生かしたいことに関する協議が行われた。

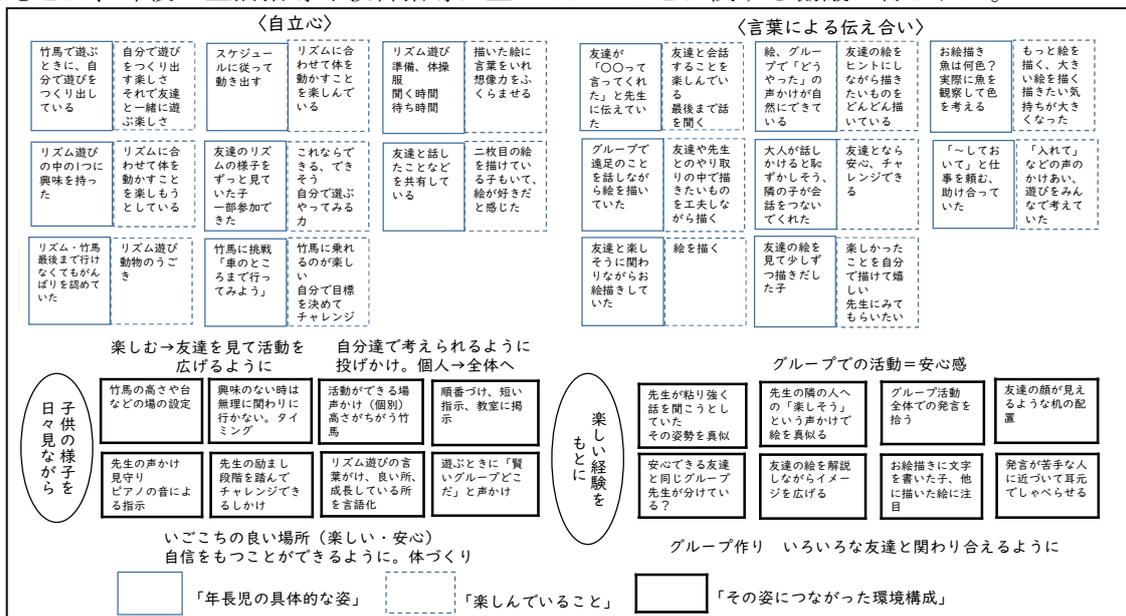


図1 協議において小学校教員の付箋と保育者等の発言を模造紙にまとめたもの

表2 「自立心」に関する付箋の記述内容や付箋をもとに発言した内容（一部抜粋）

年長児の具体的な姿	楽しんでいること	その姿につながった環境構成
スケジュールに従って動き出す	次は何をしないといけないか自分から動くことができる	スケジュールを一つ一つ短く指示をして順番を付けて教室に残している
友達が活動をしている様子をずっと見ている	これならできる、できそう 自分で選び、やってみる	5歳児がリズム活動に最後まで取り組みなくてもがんばりを認めている
竹馬に挑戦。「車のところまで行ってみよう」	竹馬に乗れるのが楽しい 自分で目標を決めてチャレンジ	先生の励まし。段階を踏んでチャレンジできるしかけ

表3 「言葉による伝え合い」に関する付箋の記述内容や付箋をもとに発言した内容（一部抜粋）

年長児の具体的な姿	楽しんでいること	その姿につながった環境構成
絵を描く時グループで「〇〇があった。」と声のかけあい自然にできている	覚えていることを確かめている	友達の顔が見えるような机の配置
グループで遠足のことを話しながら絵を描いている	友達や先生とのやり取りの中で描きたいものを工夫しながら描く	グループに友達がいる中で絵を描くことで安心感につながっている
友達が「〇〇って言ってくれた」と先生に伝えていた	友達と会話することを楽しんでいる	保育者が粘り強く話を聞く姿勢を取っている

## (2) 5歳児と1年生の交流活動

交流活動は、昨年度は1年生担任だけで計画していた。保育者等との事前の打合せでは、活動の流れや時間の確認、支援が必要な5歳児と1年生の情報交換を行うのみで、交流活動の目標の共有や事後の振り返りを行っていなかった。そこで今年度は、保幼小連携・接続の二つの視点を軸に幼児期の経験や学びを生かした交流活動となるように、保育者等と1年生担任と一緒に交流活動の計画を立てた。

交流活動の計画を立てる際に、保育者等と1年生担任は「交流活動様式」に沿って話し合いを進めた。保育者等と1年生担任が確認した5歳児と1年生の「幼児期の経験や学び」について表4に示す。5歳児の4月から9月までの育ちとして、「自立心」では友達と一緒にだと頑張ることができる、子供たち同士のつながりが見え始めた、「言葉による伝え合い」では、自分の意見を伝えるだけでなく相手の思いも聞く姿勢が育まれつつあるなどの記述があった。1年生が5歳児の時の4月から3月までの育ちとして、「自立心」では友達と一緒にだと難しいことや困ったことがあっても挑戦してみようとしたり、「言葉による伝え合い」では、自分の思いを伝えるとともに相手の思いも聞き、共感したり新たなことを発見したりするなどの記述があった。「5歳児・1年生の活動」を話し合う中で、保育者等は「遊びたいおもちゃを自分で決めることが難しい5歳児がいるが、園では仲良しの友達がいるグループだと自分から進んで活動することができる」という5歳児の実態を説明した。具体的な支援を考える上で、1年生担任は保育者等の発言を受けて、5歳児が日頃から園で活動しているグループで行動することと、グループで話し合っ自分達で遊びたいおもちゃを決めることができるように、各グループにおもちゃの名前が書かれたスタンプラリーカードを一枚渡すことを提案した。また1年生担任は、5歳児と1年生の言葉のやり取りを促すために、1年生の役割に5歳児のグループを案内する係を作ることを提案した。「5歳児・1年生の活動」に沿って「5歳児・1年生の支援」を話し合う中で、グループで行動する5歳児への支援として、「仲のいい友達と一緒に行動し、つながりをもつことができるようにする」という内容、5歳児のグループを案内する係の1年生への支援として、「困っているグループがあれば、『〇〇に行くといいよ。』と5歳児に促すことができるように声をかける」という内容が挙げられた。このように、保育者等と1年生担任は5歳児と1年生の実態を踏まえて活動内容や支援を話し合った。

交流活動で、1年生担任が5歳児の各グループにスタンプラリーカードを一枚渡したところ、5歳児はグループの友達と遊びたいおもちゃについて相談し、遊びたいおもちゃを自分達で決めて行動する姿が見られた。また、案内係の1年生は、遊びたいおもちゃの場所が分からない5歳児を案

内したり、5歳児にお勧めのおもちゃについて話す姿が見られた。

表4 交流活動計画「幼児期の経験や学び」に関する記述

	5歳児	1年生
自立心	<ul style="list-style-type: none"> <li>・友達と一緒にいたらがんばれる気持ちが芽生えてきた。</li> <li>・運動会に向けて子供同士のつながりや教え合いなどをすることが増えた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・少し難しい事でも友達と一緒に挑戦してみようとする。また、友達や保育士に励まされてやってみようとする。</li> <li>・困ったことがあると友達に助けを求めたり、自分達で話し合っ解決しようとしたりする。</li> </ul>
言葉による伝え合い	<ul style="list-style-type: none"> <li>・伝え合いをする中で、相手の話を受け止める姿があり、伝え合うことができている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の思いを伝えるとともに相手の思いも聞こうとする。</li> <li>・自分の経験したことや感じたことを出し合い、友達の思いを聞く中で、共感したり、新たなことを発見したりする。</li> </ul>

### (3) アンケート調査

保育職場体験の参加者に対するアンケート調査結果を図2に示す。質問項目①の保幼小連携・接続の視点を入れた保育参観シートを使用したことについて、回答者の71%が「良い」と回答し、その理由から保育参観シートがあることで、参観する視点が具体的になったことが分かった。一方、「どちらでもない」と回答した理由として、「自立心」はどう見取ればいいのか難しかったという意見があった。また、質問項目②の事後協議の際に保育参観シートを使用したことについて、回答者の83%が「良い」と回答し、その理由から話し合いの視点があることで、その視点を中心に話し合うことができたことが分かった。

交流活動の実施者に対するアンケート調査結果を図3に示す。質問項目③の交流活動を保育者等と小学校教員と一緒に作成したことについて、回答者の86%が「良い」と回答し、その理由から子供の様子や交流活動での支援について話し合うことができたことや保育者等が大事にしてきたことを知り、交流活動に役立てることができたことが分かった。また、質問項目④の保幼小連携・接続の視点を入れた交流活動計画の様式を使用したことについて、回答者の86%が「良い」と回答し、その理由から保幼小連携・接続の二つの視点で子供の具体的な姿を想像しながら支援を考えることができたことが分かった。

対象者全員に対するアンケート調査結果を図4に示す。質問項目⑤のA小学校区の保幼小連携・接続で大切にしている「自立心」と「言葉による伝え合い」の視点を、以前と比べて意識するようになったかについて、回答者の89%が「意識するようになった」と回答し、その理由から園での活動や遊びが小学校教育につながっていることやそれらを小学校教育に生かそうという意識をもっていることが分かった。また、「以前から意識していた」と回答した理由として、就学前につけて欲しい大事な力という認識であるという意見があった。

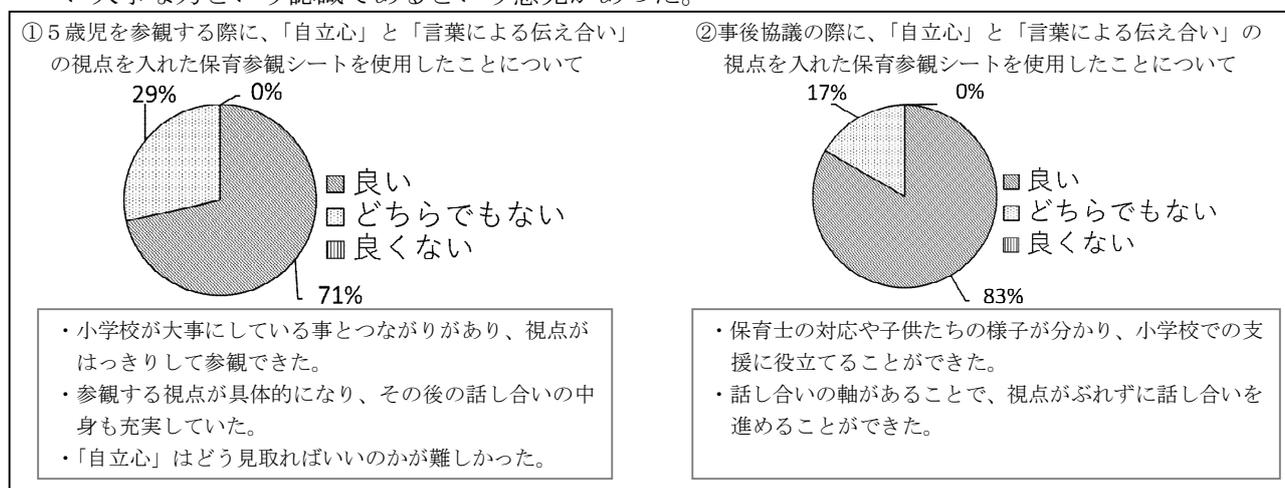


図2 保育職場体験の参加者に対するアンケート調査結果

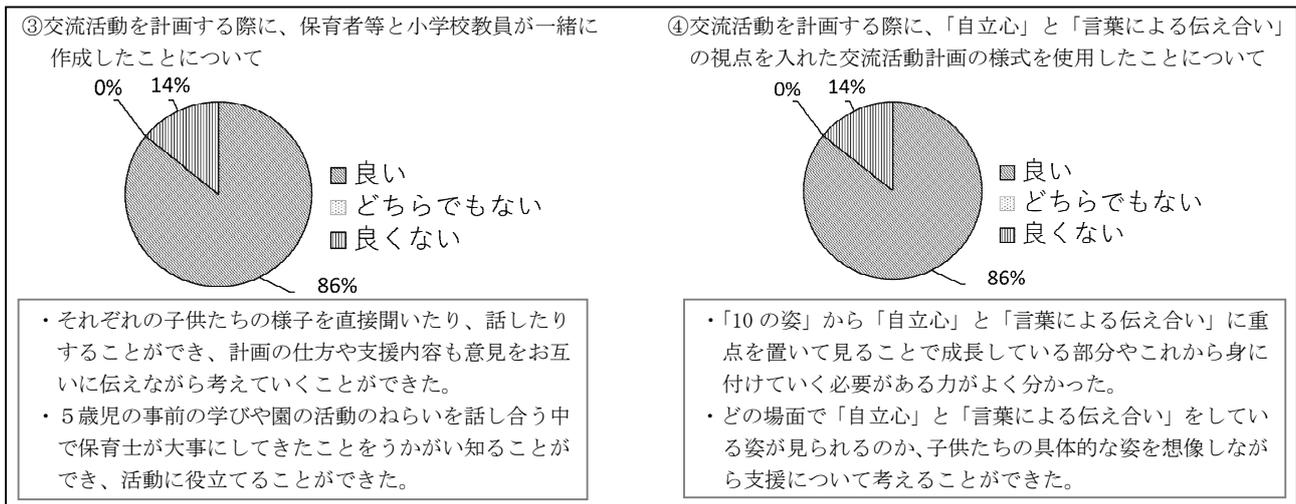


図3 交流活動の実施者に対するアンケート調査結果

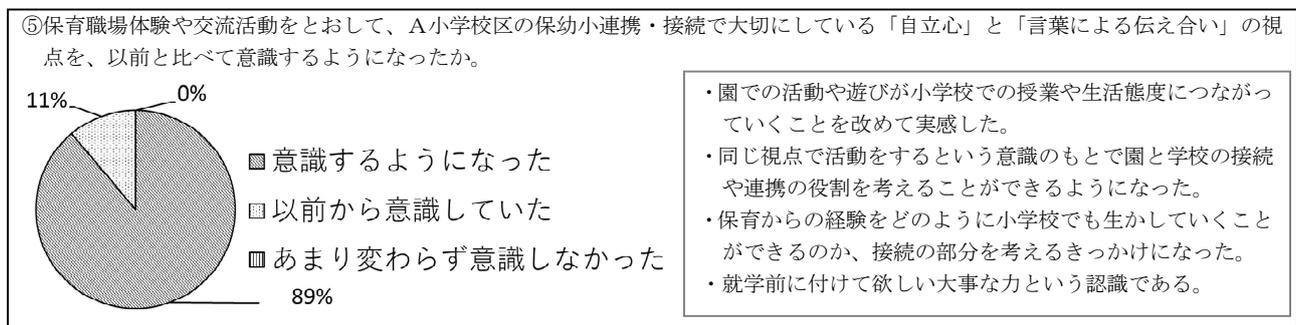


図4 対象者全員に対するアンケート調査結果

## 5 考察

### (1) A小学校区B保育園での保育職場体験

小学校教員が「自立心」の視点で見取った、スケジュールに従って動き出すという5歳児の姿からは、「解説」の「自立心」の項目にある「見通しをもって行動している」という姿が、自分で目標を決めて竹馬に挑戦している5歳児の姿からは、「自立心」の項目にある「あきらめずに挑戦したり繰り返したりしている」という姿がそれぞれ育ちつつあると考えられる。また、「言葉による伝え合い」の視点で見取ったグループで絵を描いている時に5歳児同士で会話する姿からは、「解説」の「言葉による伝え合い」の項目にある「経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりする」という姿が育ちつつあると考えられる。アンケート調査の質問項目①「参観の際に保育参観シートを使用したこと」に関する結果や、教員Dの聞き取り調査の「参観の視点をA小学校の課題である対話と関連している『10の姿』の『言葉による伝え合い』と示したことにより、参観する視点をはっきりもち、5歳児が友達同士でどんな会話をしているかに着目することができた。」という回答を踏まえると、小学校教員は保幼小連携・接続の二つの視点に着目して参観することができたのではないかと考えられる。

また、「今後の生活指導や教科指導に生かしたいと思うこと」について、小学校教員が考えた「児童の目につくところに片付け方を示して今までよりさらに自分達で片付けることができるようにする」という内容は、保育者等の発言にあった「自分達でいろいろなことを考えて自主的に行動できるようにする」とことと関連し、これは「解説」の「自立心」の項目にある「自分でできることは自分でする」という幼児期の経験や学びを小学校でさらに伸ばすことにつながると考えられる。同じく小学校教員が考えた「図画工作科の授業で課題をイメージしにくい児童のためにグループ活動を取り入れて互いの作品を見て話しながら制作できるようにする」という内容は、保育者等の発言に

あった「友達の様子を見て活動が広がるように工夫する」や「グループで日々の活動に取り組み、友達と関わり合えるようにしている」ことと関連し、これは「解説」の「言葉による伝え合い」の項目にある「経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりする」という幼児期の経験や学びを小学校でさらに伸ばすことにつながると考えられる。アンケート調査の質問項目②「協議の際に保育参観シートを使用したこと」に関する結果や、教員Dの聞き取り調査の「保育士がどのように子供たちに見通しをもたせているかを知り、小学校での視覚支援や児童への声かけなどを考えた。」という回答を踏まえて、小学校教員が見取った5歳児の姿やその姿につながった環境構成をもとに保育者等と協議し、小学校に生かしたいことについて考えることは、小学校教員が保幼小連携・接続の二つの視点での幼児期の経験や学びをさらに伸ばすために、小学校での学習や生活の在り方を考えることにつながるのではないと思われる。

## (2) 5歳児と1年生の交流活動

交流活動の計画を立てる際に、保育者等の5歳児の実態についての発言を受けて、「自立心」と「言葉による伝え合い」を育むために、1年生担任は5歳児がグループで話し合っ自分達で遊びたいおもちゃを決めるという「5歳児の活動」を提案した。「グループで話し合う」ことは、5歳児の「言葉による伝え合い」に関する「伝え合いをする中で、相手の話を受け止める姿があり、伝え合うことができている」姿が育ちつつあると捉えることができる。「自分達で遊びたいおもちゃを決める」ことは、「自立心」の「自分がやりたいことを自分で選んで行動している」姿が育ちつつあると捉えることができる。また1年生担任は、1年生の役割に5歳児のグループを案内する係を作ることを提案した。その理由として、「5歳児と1年生の言葉のやり取りを促すため」と発言していた。これは、「言葉による伝え合い」に関する「自分の思いを伝えるとともに相手の思いも聞こうとする」という幼児期の経験や学びをさらに発揮させようとすることにつながっている。

交流活動で見られた、グループで話し合っ自分達で遊びたいおもちゃを決めている5歳児の姿から、「自分がやりたいことを自分で選んで行動している」という「自立心」に関する姿が表れており、「伝え合いをする中で、相手の話を受け止める姿があり、伝え合うことができている」という「言葉による伝え合い」に関する力を発揮していると考えられる。また案内係の1年生の姿から、1年生は「自分の思いを伝えるとともに相手の思いも聞こうとする」という「言葉による伝え合い」に関する幼児期と事前の学びで育まれた力を発揮していると考えられる。

これらのことと、アンケート調査の質問項目③「保育者等と小学校教員と一緒に交流活動の計画を立てたこと」に関する結果や、教員Dの聞き取り調査の「5歳児と1年生の事前の学びからそれぞれの成長を踏まえて交流活動の内容を考えたことで、活動のねらいが明確になった。」という回答を踏まえて、保育者等と1年生担任が5歳児と1年生の実態をもとに話し合うことで、1年生担任は5歳児の育ちを理解し、5歳児と1年生に育みたい力やそのための活動内容や支援の仕方を保幼小連携・接続の二つの視点で考えることにつながったのではないと思われる。

## (3) アンケート調査

アンケート調査における「A小学校区の保幼小連携・接続で大切にしている『自立心』と『言葉による伝え合い』の視点を以前と比べて意識するようになったか」という質問項目の結果に、保育者等と小学校教員は幼児期の経験や学びが小学校教育につながっていることを実感したという回答があった。教員Dの聞き取り調査の回答に「5歳児の遊びや学びを通して1年生が入学までに培ってきたことを知ることで、1年生がゼロからのスタートではないことを実感し、1年生に園での経験を聞くようになった。」という内容があった。

保育職場体験と交流活動の検証内容とアンケート調査結果を踏まえて、保育者等と小学校教員が保幼小連携・接続の二つの視点を軸に幼児期の経験や学びを共有することで、小学校教員は幼児期の経験や学びが小学校教育につながっていることを実感し、小学校教育に生かすことについて考えることができたのではないと思われる。

## 6 成果と課題

### (1) 成果

本研究では、まず意識調査を行うことで、幼児・児童に育みたい資質・能力がA小学校の学校教育目標に沿っていることを再確認できた。

また、校内研修をとおして、A小学校教員に「10の姿」で子供の経験や学びを見取ることや、保育者等と小学校教員が幼児期の経験や学びを共有したことを小学校での学びや生活に生かしながら発展させていくという架け橋期に求められている小学校教育の充実についての理解を促した。

保育職場体験では、小学校教員が保幼小連携・接続の二つの視点で5歳児の遊びの中の経験や学びを捉えることができるようにA小学校独自の保育参観シートを活用した。小学校教員が記入しやすいように保育参観シートには、5歳児の具体的な姿を参観するための説明や保幼小連携・接続の二つの視点で5歳児に見られるであろう具体的な姿を書き加えるという工夫をした。参観後は、保育参観シートをもとに保育者等と保幼小連携・接続の二つの視点での5歳児の姿を中心とした協議を行った。その結果、小学校教員は遊びの中の具体的な子供の姿からこれまでや現在の経験・学びを見取ったり、小学校教育に生かしたいことについて考えることができた。5歳児と1年生の交流活動では、保幼小連携・接続の二つの視点での5歳児と1年生の幼児期の経験や学びをもとに、保育者等と1年生担任と一緒に交流活動を考えることができるように「交流活動様式」を作成した。

「交流活動様式」には、保幼小連携・接続の二つの視点の育みたい子どもの姿を参考にして活動内容や支援を考えるために5歳児に見られるであろう具体的な姿を書き加えるという工夫をした。その「交流活動様式」を活用して保育者等と一緒に交流活動の計画を立てる機会を設定した。その結果、1年生担任は5歳児の育ちを理解し確認した上で、5歳児と1年生に育みたい資質・能力やそのための活動内容や支援の仕方を考えることができた。

これらの取組をとおして、保育者等と小学校教員が「10の姿」を手掛かりに子供の成長を中心に据えて幼児期に育まれた資質・能力を共有したことを踏まえて教育活動を実施するという保幼小の架け橋期における小学校教育の充実につながることもできた。

### (2) 課題

保幼小連携・接続の年間行事の機会も大切にしながら連携・接続を図ることをとおして、保育者等と小学校教員が幼児期の遊びの中の経験や学びを共有し、小学校教員が幼児期の遊びの中に育ちや経験、学びがあることを理解した上で小学校での指導方法や授業改善に生かし、架け橋期のカリキュラムの充実を図りたい。

また、幼児期の経験や学びを小学校教育に生かすだけでなく、学校全体で目指す子供像や育みたい資質・能力を共有し、1年生で培った力を次の学年へ、また次の学年へと学びをつないでいくことで、学校教育目標の実現に向けたさらなる取組につなげていきたい。

### 【参考・引用文献】

- 文部科学省 (2017) : 小学校学習指導要領解説 (生活編)
- 文部科学省 (2018) : 幼稚園教育要領解説
- 厚生労働省 (2018) : 保育所保育指針解説
- 内閣府・文部科学省・厚生労働省 (2018) : 幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説
- 文部科学省 (2022) : 幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き (初版)
- 文部科学省 (2022) : 幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引きの参考資料 (初版)
- 高知県教育委員会事務局幼保支援課 (2018) : 高知県保幼小接続期実践プラン
- 高知県教育委員会事務局幼保支援課 (2020) : 指導計画・園内研修の手引き～つくろう 笑顔の輝く明日の保育～【改訂版】
- 高知県教育委員会事務局幼保支援課 (2022) : 令和4年度保幼小連携・接続の実施状況アンケート結果
- 高知県教育委員会事務局幼保支援課 (2023) : 保幼小連携・接続 交流活動事例集 改良版交流活動計画 (あきのおたのしみかい)
- 湯川秀樹・山下文一 (2023) : 幼保小の「架け橋プログラム」実践のためのガイド、ミネルヴァ書房